

令和7年度 学校評価総括表 伊丹市立こうのいけ幼稚園

教育目標		豊かな心をもって、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ―不思議発見！わくわくいっぱい！笑顔あふれるこうのいけー						
重点目標		安全・安心な教育環境のもと、「子ども主体」の遊びを支え、子どもの主体性を育む教育を推進する						
項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	生きる力の基礎を育む	主体性の育み	・遊び込む子どもの姿を捉え、内面の育ちを支える保育環境づくりを進める。	・合同研修会の中で遊び込む子どもを支える環境の構成のポイントを明らかにする。 ・計画的に園内研究会（保育公開及び協議）を実施し「遊び込む子どもの姿」を支える環境の構成の保育実践について共同研究園の職員と共に学び合う。 ・日々の保育室環境や園庭環境の構成の中で、子ども達が興味関心を深め、遊び込む子どもの姿につながる環境の構成を整える。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもたちの意欲や主体性が育まれるように努めている」「子どもは、幼稚園で『遊び込んでいる』と感じる」と回答した割合が、それぞれ90%以上になる。	B	・子どもを支える環境の構成のポイントを明らかにするための話し合いを重ねることで、様々な視点から環境の構成のポイントを見だし深めることができた。 ・共同研究園で共同研究会を年間6回実施し、カンファレンス・保育公開、市内公開を行い、保育実践を通して遊び込む子どもを育てるための環境の構成のポイントについて共に学びを深め共通理解をすることができた。 ・短期案の振り返りを行う中で、「遊び込む子どもの姿につながる環境の構成について」子どもの興味関心から意見を出し合い、共通理解を行ない、教師間で連携を取りながら必要な環境を整えることができた。 ・保護者アンケートにおいては、それぞれ90%、90%、100%の肯定的な回答を得ることができ、保育への理解を得ることができた。	・遊び込む子どもの姿につながる環境の構成について、子どもの姿から検証を重ね、より質の高い保育環境を整えていく姿勢を大切にする。 ・目の前の子どもの興味関心や学びを読み取る力を高め、子ども自らが興味関心を深め遊び込んでいくことができる環境の構成を行う。	・教育委員会指定研究発表会を実施され、保育が充実されたと評価している。
		自然とのかかわり	・園庭の草花や野菜に興味関心をもち、自然に関わることができるよう、季節や学年に応じた栽培計画を立て、四季を感じられるように園庭の環境を整える。 ・身近な自然事象について興味・関心が深められるよう、子どもの探究心、好奇心に寄り添い、発達年齢に応じた環境を準備し、異年齢の関わりの中で伝え合い、学び合いができるようにする。	・一年を見通した栽培計画のもと、子どもが四季を感じられるような園庭環境、花壇を整え、身近な自然に興味をもち親しんで関われるようにし、植物や野菜の栽培を通して、成長の様子に関心をもち観察したり、収穫した野菜を食べたりする直接体験から自然が身近に感じられるようにする。 ・年齢に応じた図鑑や絵本、視覚的教材等を準備し、子どもが好奇心、思考力、探求心を働かせ、調べたり、観察したり、飼育したり、自ら自然に関わる姿が増える。 ・保護者アンケートにおいて、「子どもは、自然への興味・関心が深まっていると感じる」と回答した割合が、90%以上になる。	A	・各学年で栽培計画を立て、季節の植物や野菜を栽培することで、変化や成長、美しさに気付くなど関心をもつ姿が見られた。また、野菜の栽培では、収穫した野菜を園で食べる機会をもつことで食育活動にも繋げることができた。 ・保育室やテラス等、子ども達が手に取りやすい場所に虫や草花の図鑑を用意したり、季節に応じた花や虫、自然事象（氷、雲）などの写真を掲示したりして環境を整えたことで、興味や関心が深まり、不思議に思ったことを調べたり、観察したりなど、自然物を遊びの中に取り入れる姿が見られた。また、発見したことや疑問に思ったことを友達や異年齢で伝え合う姿も見られた。 ・保護者アンケートにおいては98%の肯定的な回答を得られた。	・季節の草花や虫などに興味や関心をもち、調べたり、観察したり、試したりする面白さを感じることができるよう、引き続き図鑑や虫眼鏡などの教材を準備する。 ・様々な自然物を遊びに取り入れられるように花壇や園庭などの整備を行う。また、年間を通じて計画していく。 ・教師自身も幼児と共に自然事象に興味をもち、好奇心や探究心をもって様々な事象に関わることができるような環境を整える。	・子どもにとって、必要感をもって取り組んでおられることがわかった。
	一人一人を大切に する教育	特別支援教育の推進	・一人一人の発達の特性や実態を把握した支援計画や合理的配慮をもとに、スモールステップで目標が達成できるよう支援に努める。 ・保護者の抱える子育ての悩みに寄り添い、丁寧な傾聴を心がけ、家庭との連携を図る。 ・職員間においては、学年を超えた子ども理解の共有と連携を図る。研修会に積極的に参加する。 ・必要に応じて関係機関の意見を仰ぐ。	・園生活を自分の力で進めやすくなるように、子どもの発達や特性に応じた過ごしやすい環境の設定や支援を行う。 ・保護者の悩みに寄り添い、丁寧な傾聴を行う。また、にじいろ保育にかかる保護者においては、保護者間の親睦を深められるよう、保護者懇談会を学期ごとに1回、実施する。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、個々の発達や特性に応じた指導を行い、一人一人を大切にした教育を行っている」と回答した割合が90%以上になる。 ・専門的な指導を受け支援をおこなうことができるように、コンサルテーションを学期に1回利用する。	A	・視覚支援教材を作成・活用し環境を整えたことで、自分で見通しをもち主体的に園生活を進める姿が見られるようになった。 ・保護者の悩み、相談に対してその都度懇談を行い、丁寧な傾聴に努めた。また、支援対象児の保護者懇談会を学期ごとに実施したことは、悩みの共有・共感、アドバイスなど保護者同士が意見交換できる場となった。 ・保護者アンケートでは90パーセントの肯定的な評価を得られた。 ・学期に一度コンサルテーションを利用し、専門的な視点から支援方法を学び実践につなげることができた。さらに研修会で学んだことを職員間で共有することで連携を深めることができた。	・引き続き、全ての子どもが同じ場で安心して過ごし、共に育ちあえる環境の調整を行う。 ・保護者の悩みや相談には丁寧に傾聴し、子どもと保護者双方にとって安心できる保育に努める。 ・肯定的な評価に甘んじず、さらなる支援の質の向上と、保護者との信頼関係の構築につなげる。 ・今後も定期的にコンサルテーションなどを利用し、専門的な視点からの支援方法を学び、実践する。	・一人一人の実態に合わせて、支援されていること、また、関係機関との連携を図りながら進められていることがよい。
豊かな心・健やかな体	思いやりの心の育成	生命の尊重・道徳性の芽生え	・飼育や栽培を通して生命の大切にする、豊かな心を育む。 ・異年齢で関わりやすいように環境を構成し、子どもが色々な人との関わりを知り、優しさや思いやり、感謝の気持ちに触れられるようにする。 ・研修を通して教師の道徳性を高め、人権感覚を見直し、考える。	・子どもが主体的に飼育や栽培に携わり毎日観察したり世話をしたりしながら生命の大切さを知り、生命に触れることや収穫することを喜ぶ。 ・好きな遊びの中で異年齢の遊びの姿から刺激を受けて同じ遊びをする中で優しい気持ちや感謝の気持ちが芽生え、お世話をしたりやり方を教えてあげたりする姿が見られる。 ・教師が人権研修に参加し講座を聞いたりグループワークを行ったりする中で自信の人権感覚を見つめ直し磨くことで教師自らの道徳性を高め、保育に生かす。	B	・幼児の興味や関心に応じて栽培活動を計画したり、飼育活動を行ったりすることで命のつながりに触れる機会がもてた。 ・季節に合わせた野菜や植物を育てることで成長過程に興味をもち、水やりをしたり観察したりする姿につながった。また、収穫をした野菜を園で食べたり、持ち帰ったりする機会をもったことで、さらにさまざまな野菜への興味関心につながった。 ・好きな遊びの時間に教職員が意識的に異年齢で関わり合える環境を準備したことで異年齢同士で同じ場で遊んだり関わったりする姿が見られた。また、遊びの中で友達遊びに興味をもったり年下の友達に優しく声を掛けたりする姿が見られた。 ・人権研修会に参加し、教師自身の意識改善に努めた。また、子どもの人権をテーマに保護者研修を行ったことで日頃の生活の中での子どもへの関わり方を振り返り保護者と共に人権意識を高めた。	・引き続き、栽培活動や飼育活動を通して、命のつながりや育みを感じることができるようにする。 ・今後も好きな遊びの時間を中心として異年齢で関わる機会を大切にしたい保育を継続していく。 ・人権感覚を高めるための研修会に積極的に参加し、さらに学びを深めていく。 ・引き続き、年1回以上の人権をテーマにした学級懇談会などを行い、日常生活を振り返って考えたり話し合ったりする機会を大切にしていく。	・異年齢のかかわりに着目され、保育を展開されていることがよい。

開かれ信頼される学校園		健やかな体作り	基本的 生活習慣の確立	・子どもの実態を把握し、担任と養護教諭が連携して保健指導や保健学習を行う。 ・家庭と連携を図りながら、生活習慣を身につけていけるよう、定期的に「げんきカレンダー」を配布し、親子で健康に関する目標に取り組んでもらう。 ・健康に関する情報を、意識の向上につながるよう、ほけんだより等で家庭へ啓発する。	・幼児期に身につける生活習慣を「げんきカレンダー」の目標にし、子どもが自ら生活習慣を身につけようとする。 ・保護者アンケートにおいて『「ほけんだより」や親子で取り組む「げんきカレンダー」は、健康な生活を意識する機会となっている」「子どもは、「基本的生活習慣や健康な生活について、意識をもち自ら取り組もうとする姿が見られる」と回答した割合が、それぞれ85％以上になる。 ・時期に合わせた「ほけんだより」を月1回以上配布する。	A	・幼児期に身につけるべき生活習慣を「げんきカレンダー」の目標にし、それに応じたほけんの話をするこで、子ども自身が取り組みやすい内容にしているため、自ら取り組む姿が見られた。 ・学期に1回「早寝・早起き」のげんきカレンダーを配布することができ、保護者からのコメントでは、子ども自身が時計を意識して取り組むことができたことが分かった。 ・保護者アンケートでは肯定的な回答の割合が90％以上であった。 ・時期に応じた「ほけんだより」を月1回以上配布することができた。	・幼児期において、基本的生活習慣の確立は、家庭との連携なしでは難しいため、今後も「げんきカレンダー」を活用しながら啓発していく。 ・子どもが自分自身の健康に関心を持ち、基本的な生活習慣の確立に向けて取り組めるよう、引き続き機会を捉えて指導することを継続していく。	・今年度は、特に睡眠に関する啓発に力を入れたと聞いた。幼児期から十分に睡眠をとることは重要で、今後も保護者への啓発を続けてほしい。
	開かれ信頼される学校園	教育活動への理解の推進	家庭・地域との連携	・日頃の園生活や子どもの学びについて掲示やホームページなどを用いて可視化し、積極的かつ継続的に園の情報、子どもの学びを発信する。 ・小学校との連携・交流を図る。 ①校内研究会への参加、園内研究会への参加呼びかけ等、教師間の連携を進め、互いの教育についての理解に努める。 ②幼児・児童、双方にとって教育的価値につながる交流活動を探る。	・通用門横の掲示板や保育システム、ホームページなどを通してタイムリーに子どもの遊びの様子を伝えたり、遊びの中での子どもの学びを月2回程度等分かりやすく知らせたりする。 ・保護者アンケートにおいて、「えんだよりやクラスだより、ホームページや掲示板等は、幼稚園での行事や活動の様子、園の教育方針、子どもの学びや育ち等を知るのに役立っている」と回答した割合が、80％以上になる。 ・小学校の研究会に積極的に参加し、“主体的な授業改善”の取り組みから「遊び込む子ども」を育成するための保育実践について学ぶ。また、小学校教育の理解に努めると共に、架け橋期のカリキュラムについての学びを深める。 ・接続・連携活動が幼児・児童にとって学びが深まる活動になるように、内容に応じた施設での接続・連携を計画・実施し互いの幼児・児童にとっての学びを深める。また、その価値を保護者や地域に発信していく。	B	・保育システムの導入により、従来の掲示や発信方法からの変更があったが、積極的に学びの発信に取り組むことはできた。 ・保護者アンケートで肯定的な回答の割合が80％で以上であった。 ・校内研に積極的に参加し、それぞれが日々の保育に取り組む中で、接続期を意識し今大切にすることは何かを考える機会を多く持つことができた。また、夏季休業中に隣接する小学校での研修会に参加し、幼児教育についてプレゼンをする機会を得たことで、小学校教員と、昨年度以上に学びのつながりについて実際の子どもの姿から語り合い、学び合うことができた。今後も引き続き幼小接続、架け橋期のカリキュラムについての学びを共に学び合い、架け橋期を意識した保育実践をおこなっていく。 ・双方の学習や学びとなる交流活動（1年生、2年生4年生の生活科、学校行事・音楽会、5年生との給食交流 等）も、継続して実施することができた。	・日々の保育の様子から、子どもの学びを、保育システムを用いて発信することができた。動画の配信回数が少なかったので、意識をして取り組んでいく。 ・保護者や地域に対し、子どもたちが遊びを通して、何をどのように学んでいるのかについて、自園における教育保育の理解が得られるように発信していく。 ・「幼児期から児童期の滑らかな接続」をめざし、小学校との連携や交流を深め、架け橋プログラムの推進に努める。 ・幼児・児童の交流については、定着している年間プログラムを継続していく。職員間の連携、学びの場についての今年度の取り組みを継続し、定着させていくようにする。	・鴻池小学校との連携は、昨年度以上に工夫されていることがわかる。双方のカリキュラムにとって重要であるとわかった。
		安心で安全な園作り	危機管理の徹底	・施設内を点検し、危険箇所は写真を用いて可視化し、共通理解を図る。破損や危険箇所(設備・害虫等)があれば速やかに対応・改善する。 ・遊びの中での危険やけがを防ぎ、安心・安全に幼稚園生活を送れるように、危険箇所を報告しあい、職員全員で共通理解且つ改善に努める。 ・学校安全計画、事件事故への対応マニュアル及び防災計画、洪水時の避難確保計画を職員全員で確認し、様々な事象を予想した避難訓練(洪水、火災、地震、防犯)・通報訓練(火災、県警ホットライン)を実施する。 ・保育システムを活用した緊急時の保護者への連絡と引渡し訓練を実施する。	・園児が安全に過ごすことができるように、安全点検、破損や危険箇所の改善に向け、毎月1回安全点検を実施し迅速な対応を行う。 ・職員の危機管理意識を強化するため、日常ヒヤリハットを迅速に伝達し合い、環境設定を見直したり、改善策を素早く話し合ったりしていくようにする。また、必要に応じて子どもへの指導の機会を増やしていく。 ・年5回避難訓練及び通報訓練を実施し、反省点を踏まえて実践につなげるとともに、マニュアルや各計画を見直す。 ・安全カード、保育システムを活用した保護者への連絡と引渡し訓練を実施し、実情に応じた対策を検討する。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、安全を意識した改善を行い、遊びを通して学ぶ場として、子どもが活動しやすい環境を整えている」と回答した割合が、80％以上になる。	A	・子どもの実態に即して計画通りに行うことができた。5歳児が鴻池小学校4年生との「自然災害博覧会」の交流は、子どもの意識向上を図ることにつながった。 ・安全点検を毎月行い、経年劣化による破損を除去したり、危険箇所はすぐに対応したりした。 ・子どもの思いがけない怪我など、有事の対処については、危機管理マニュアルを活用し、第1発見者からの伝達、迅速な対応、教師間の連携、他の子どもへの指示・誘導など職員誰もが対処できるようにすることが必要である。 ・避難訓練では、鴻池小学校と共同実施をした地震災害時の引き渡し訓練や、小学校で実施された防犯訓練に参加するなど、連携を図りながら計画的に取り組む、学ぶことができた。今後も細やかな連携を図り、防災、防犯に取組んでいく。 ・保護者アンケートで肯定的な回答の割合が80％以上であった。	・隣接する小学校との連携・交流会に参加することで、自然災害に関する園児の興味関心の高まりが例年以上に見られた。教師間の連携だけでなく、園児、児童の交流の中での学びを継続できるように引き続き取り組んでいく。 ・様々な状況に、全職員が対応できるように危機管理マニュアルの周知を行う。 ・川沿いの本園フェンス沿いの無断駐車が増加している。適宜対処していく。	・安全教育に関して、小学校の授業と関連付けて取り組まれていることがとてもよい。

学校関係者評価総括
・教育委員会指定研究会にて、保育を公開された実践などを評価したい。また、小学校との連携の充実されていることがわかる。 ・幼稚園での教育活動を進めるにあたり、園児の実態から計画、実施されていることを次年度にも継続してほしい。
次年度に向けた重点的な改善点
・次期教育要領の改訂が進められている中、今日の教育課題等もふまえて、本園のカリキュラムマネジメントを進めていく。特に、幼小中一貫教育の推進があげられていることから、幼児期と児童期の教育の接続に向けて、より、充実・発展していくよう取り組んでいく。 ・子どもを取り巻く環境が様々である状況をふまえ、子ども一人一人にとってよりよい保育を推進できるように、職員一体となって、保育環境づくりや異年齢児とのかかわりなど、教育活動の充実を進めていきたい。

自己評価の基準 A：目標を上回った B：目標どおりに達成できた C：目標をやや下回った D：目標を大きく下回った